

ほのぼの

第3号

平成15年
3月

発行

神戸市須磨区戎町1-2-3
TEL 078-732-5209
信行寺門信徒会



報恩講

住職が「御絵伝」の解説←



報恩講法要の模様

十二月十四日と十五日の両日に、報恩講が修行されました。

この報恩講は浄土真宗を開かれた親鸞聖人、ご往生の日を、ご縁として、聖人の九十年のご生涯を偲ばせていただきそれとともに、聖人のご苦勞によつて今日を生きる私達がお念仏のみりにあえた、お慶びを、さらに深くかみしめていただく大切な法要です。

初日の十四日は、住職から「親鸞聖人御絵伝」についての解説があり、お参りになつた方々は、親鸞聖人の生涯をくわしく承知し更めて、そのご遺徳を痛感させていただきました。なお、この「御絵伝」は今年はじめて信行寺に迎えられたもので、今後の報恩講にはお目にかかることができます。十五日は、宇野行信先生からご法話をいただき、お念仏のいただき方などについて聴聞させていただきました。



『眞実の眼』

住職 米田睦雄

この世を生きているわたしの現実には、「死ぬな」といわれ
ても、寿命の尽きる時は死んでゆく。「ケガすな、病氣す
な」といわれても、生身の身体をもっている以上、ケガも、
病氣も避けられない。そのような「いのち」を生きている現
実を見落とすと、ことば（情報）に惑わされてしまいます。

「悪いことをするな、善いことをせよ」というのが仏さま
の教えです。しかし、わが身にこのことを問うとき、「はい、
仰せのとおり悪いことを止め、善いことだけをして生きてお
ります」と答えることができるでしょうか。「止めようとし
ても止められない、しようとしてもできないわが身の現実」
に気づかされます。

わたしたちは、自分の行為に対する責任感と義務感にうと
いようです。よい結果の出たときには、自分の努力、能力だ
と自慢するくせに、逆に、悪い結果に対しては「〇〇が悪い
からだ」と、すぐに他人や社会のせいにしてしまいがちです。
知識の目はあつても、「眞実を見る智慧の眼」をわたした
ちは持つていません。それゆえ、「本当の幸せの世界」がわ
からないのです。知識をどれだけ持ち合せていても。

眞実を見る眼とは、阿弥陀如来さまの眼です。わたしたち

は如来の見られた世界を知らせてもらいながら日暮させてい
た、たく以外に自分にふさわしい人生をまつとうすることはで
きないことを、親鸞聖人は教えてくださいました。

眞実を見る眼をいただいで、生きていかれた人の一人に
「六連島のお軽さん」という方がいます。

お軽さんが道を求め始めたのは、主人の浮気が動機だった
ようです。夫を信じていたお軽さんは、夫を恨み、日夜煩惱
を燃やし続けて苦しんだ。その苦しみを旦那寺の西教寺の住
職に打ち明けたことから、ご法義を聞き、お念仏の生活が始
まったそうです。ほんとうに自分を幸せにしてくれることば
（ご法義）を知らせてもらったのです。

今もなお「妙好人 六連島のお軽さん」として、お念仏の
御同行に親しまれ、その旧跡（如来の大悲）を聴聞し、眞実
の眼を得たのです。お軽さんの詠まれた歌に、

弥陀のお慈悲を聞いてみりや 聞くよりさきのおたすけよ
聞くに用事はさらにない 用事なければ聞くばかり

聞けば聞くほど

底ふかく

不思議でならぬ

このお慈悲

というのがあります。わたしたちの人生、なにが起きるか分
からない一生です。そのいのち、人生が間違つた方向に流さ
れないように、阿弥陀如来さまの見られている世界、本当の
世界を知らせてもらいながら日暮させていた、たきましよう。

合掌の心

仏様に合掌すれば 信心となり

父母に合掌すれば 孝養となり

長上に合掌すれば 敬慕となり

事物に合掌すれば 慈愛となり

自分に合掌すれば 修養となり

お互いに合掌すれば 幸福となる

家庭の平和も世界の平和も

合掌の心から生まれる。

質問コーナー

住職

問 「永代経」とはどういうものですか。

答 「永代経」とは、「末永く、永代にわたってお経をあげる」ということから、呼ばれている名称です。浄土真宗のお寺では、永代経の法要を勤めます。この法要を「永代経法要」といいます。この時に永代経の懇志が包まれるのがならわしになっています。

また、「永代経」は、「永代経祠堂経」とも呼ばれます。「祠堂」とは「本堂」のことです。本堂には阿彌陀如来を安置し、阿彌陀如来の救いを聞かせていただく所です。したがって、永代経の「永代」とは、お寺の本堂が永代にわたって維持されるように願うことです。

永代経の懇志は、亡き人への追慕の思いから、亡き人のためにという願いをこめてあげられます。わたしが、如来さまの救いの手の真ん中にいると説かれています。しかし、それにとどまるものではありません。亡き人への思いを縁として仏さまの心を聞くための浄財です。

永代経には、①お寺の本堂が維持され、②わたしたちの子孫が永代にわたって仏法を聞くことができるようにするという大きな意味があるのです。

春によせて



信行寺総代 石 田 好 光

梅や桜を見るたびに、春が来たということを感じます。そしてそれを感じられることがどれだけ嬉しいことかと思えます。日本に四季があるからこそ感じることの出来るものだからです。冬の到来、そして厳しい寒さ、けれど必ず訪れる冬の終わり、それらが一層春の訪れを強く感じさせてくれるのかもしれない。

それでも昔に比べて、季節感というものは随分薄れているように思います。季節を問わず一年中、同じ野菜が食べられますし、空調機器によつて、冬であつても暖かい、夏であつても涼しい空間に身をおくことが可能です。人間は今まで努力し、より過ごしやすく生活しようとしてきた結果ですから、その恩恵に預かるのも良いことです。ですが手付かずの自然の中で自生している季節の植物の見たときの喜びを忘れてはいけないような気がします。春が来て春の植物を見るのはやはり嬉しいものです。夏に暑さに汗を流し、冬に凍えて手を擦り合わせる、そんな感覚も一つの味わいのように思えます。四季のある国ならではの贅沢だと思えば、ほんの僅かであっても、より穏やかな気持ちで厳しい四季を過ごすことが出来

るのではないのでしょうか。そしてそれは、季節だけに言えることではないかもしれません。

日本は今冬の時代です。景気は中々回復せず、税制や政策の改革も滞り、人々は寒さに苦しみ、また絶えて生きています。悪いニュースが国内に溢れ、それどころか世界情勢まで緊迫し、各国の国際関係にも歪みが生じてきています。日本は、高度経済成長の頃から、春、夏、秋と、季節が移り変われば、今まさに冬なのかもしれません。ですがもしそうだとすれば、次に巡ってくる季節は春なのです。日本であるから言えることですが、冬の次には必ず春が訪れます。そして寒さが厳しいほど、春の訪れを強く感じ、喜ぶことが出来るのです。今はまだ巡ってきていませんが、今こうして訪れた季節の春のように、日本にもいずれ春が来ると信じて生活していくしかありません。日本の社会で、梅が綻んだ時、桜の花が舞う時、穏やかな気持ちで、それを喜びたいと思います。



今世紀を思う

松井 孝

門信徒会の発足に伴って広報紙第二号「ほのぼの」が誕生した題字は住職がお書きになられたものである。これからも多くの門信徒会のみなさまの願いが伝わるような親しみ易いネーミングと感服させられた。この「ほのぼの」が長く、みなさまに親しみのあるものとして愛されるようにしたいものとして祈願している門信徒会の一人である。

さて、今世紀を思うとき、高齢者の方たちは大正時代から昭和時代が変わる時代に生れ、育った人たちである。当然であるが今考えてみると大変な時代を過ごしてきた人たちである。

昭和の始めころ（西暦1930頃）世界的な大不況に遭遇しました、戦前（1935前後）、戦中（1945まで）、戦後の（1945からはその人によって考えが違ふ）生活に心身共に全力投球をしてきた人たちでもある。

戦前のくらしは我々少年たちには祖国のためという教育を受けた最後の国民であろう。戦中、戦後には言い表すことの出来ない日本の歴史でもあった。私ごとではあるが、大阪の西区の生まれで記憶としては第一室戸台風（1934）、日中戦争始まる（1937.7.7）、大東亜戦争勃発（1941.12.08）、戦災（大阪と神戸1944.3）、にも遭遇し、戦後再び故郷に帰った

のが（1949）で丁度二十歳の春であった。

あの戦災では日本の主要都市が殆ど焼け野原となった。近年の社会情勢を聞き、また、見るにつけ大変な時代を迎えている。

デフレ、不況、失業、事件等々社会悪が目立っている、また、国際的には拉致問題等々が起きた、これらは国レベルで対応しなければならぬのは当然であるが国民レベルでも二十一世紀の社会に向けてなにをなすべきかを互いに考えていかねばならない時期と強く思う。

毎月の行事 信行寺

毎月第一日曜日 午後二時より

護法会法座「蓮如上人御一代記聞書」

毎月第二日曜日 午後七時より

仏教講座 「教行信証」 住職

毎月第三土曜日 午前十時より

仏教讃歌のつどい コーラス みやび会

毎月第三土曜日 午後二時より

定例聞法のことい 法話 住職

法義示談（信仰相談）

住職

青少年心の相談室

（仏法の質問に応じます） 副住職

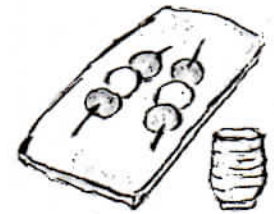
月一回日曜日 午後四時～六時まで

仏教青年会 副住職

◎とき 四月十三日(日)

◇正午から 子供大会

おつとめ・おはなし・折り紙



◇二時〜三時

第二回

花まつり文化講演会

○演題

“C型肝炎”

○講師

神戸中央市民病院
消化器内科部長

織野 彬 雄 先生

“すべて椅子席です”

▼▼“どなたでもお越し下さい”

◎ところ 信行寺礼拝堂

信行寺門信徒会総会と法話のご案内

皆様のご協力のお蔭で門信徒会が発足できまして、早や一年になります。

さて左記のとおり総会を行いますので、是非とも、ご参集よろしく願ひ申し上げます。

なお、当日は総会のあと、住職の法話をお願いしておりますのでお参りください。

記

日時 平成十五年四月二十六日(土)

午後二時〜午後四時

場所 信行寺(〇七八一七三二一五二〇九)

◎平成十五年の年会費一、二〇〇円は当日納入してください。

◎郵便振替の番号等は次のとおり

(記号番号) 一四三六〇一六四一〇六八三一

(名称) 信行寺門信徒会



新春法座

新春初法座

一月五日、初法座が午後一時から本堂においてお勤めされました。

今年はじめでの法座には六十名の方々がお参りになり、住職から新春にふさわしい、心暖まるご法話がありました。

法話終了後、二階礼拝堂で総務部の皆さんが一人一人持ち寄った自慢の料理盛合せを、美味しくいただきお念仏の声のなか、明るい笑顔があふれ、楽しいひとときを過ごすことができました。今年も体を大切にして来年の初法座にも、皆さん、さそい合わせて多数の方々のお参りを願います。

